回神は赦すか

（六　巻）

帝キネ芦屋作品

脚色者　伊藤大輔氏
監督者　松本英一氏
撮影者　大森勝氏

――役割――

馬車屋の皆吉　五味國男氏
彼の母お朝　岸邊富子夫人
彼の白痴の妹お藤　歌川八重子孃
彼の伯父源作　高堂國典氏
酌婦お秀　玉置みち子孃
工夫頭の牛澤　根津新氏
富田巡査　横山隆吉氏

〔略筋。或る村に馬車屋の皆吉と云ふ若者は病める母と白痴の妹とを養つて、父の遺産を横領した伯父源作を恨みつゝも、甲斐甲斐しい日を送つて來た。彼は近頃村へ來た酌婦のお秀に生れて始めての戀を覺え、彼女から三百圓の金の工面を頼まれた時、思案に餘つて伯父の家へ盗みに入り、伯父を殺して金を奪つたが、それはお秀と彼女の情夫牛澤の高飛びの費用に使はれて、皆吉は人々に追はれた末竹藪に足を滑らせて盲目に成る。一週間の後彼は情ある富田巡査に罪の總てを自白し、今一度お秀に會ひたいと嘆いた。巡査から之を聞いた母は、病める老の身をも顧みず白粉を塗つて監禁室に皆吉を訪れた。お秀の不貞を知らぬ盲目の皆吉には、母が情人に見えたのであつた。母の涙も知らず、皆吉は巡査に牽かれて去つて行く。一切の偽りを憎む神は、斯うした虚僞をも赦すであらうか？生ける人間の富田巡査は之を許したのである。〕

脚色も監督も共に手練れたリズムが無く、松本